

小学校教育課程への地域教材の組み込みをめざした 校長の学校づくり

学籍番号 249110
氏 名 楠田 晃久
主指導教員 森田 英嗣
副指導教員 寺嶋 浩介

1. 背景と問題意識

本研究での目的は、実習校において、校長として地域教材を小学校教育課程への組み込むことである。令和4年度から校長職に就いたが、当時、新型コロナウイルス感染症にともなう制限下の学校生活において、教育課程は大きな変更を余儀なくされていた。実習校でも、ふれあい活動や対面活動は制限されており、従前の地域学習が見られない学年があった。筆者は自ら校長として教育課程を再編するとともに、教員とともに教材研究にも取り組む。そして、担任教員へのインタビュー調査を重ねながら、児童・教職員・地域にとっての「社会に開かれた教育課程」をめざす。

2. A実習校での取り組み

2.1 A実習校について

M1のA実習校は、コロナ禍を教頭職で過ごし、コロナ後、校長職に就いた。しかし、コロナ禍の影響からか、学校と地域の関係は疎遠になっていた。コロナ前、従来行ってきた地域とのふれあいや交流、各学年の教育課程への保護者や地域の方の参画などがなくなっていた。また近年の教員の人事異動により、地域をよく知る教員も不在になっていた。実習校の教員には、学習素材の教材化を促す教材研究のスキルが途切れてしまっていたので、このスキルを伝えられるようにした。そして、地域教材を教育課程に組み込む良さを伝えることに取り組んだ。

2.2 A実習校での地域教材の教育課程への組み込み

実習校の課題に対して、令和6年度の校長としての主な学校運営方針に、教育課程の精査・精選（地域学習の復活）と若手教員の育成を入れた。まず校長として、教員のゆとり（放課後、学校休業日等）を生み出すため、教育課程を再編した。

次に教員とともに、校区の強みを生かし、地域の学習素材の教材化にも取り組んだ。社会見学や校外学習を従来の対面活動に戻しながら、朝の登校見守りボランティアを町たんけんのゲストティーチャーに復活させた。また保護者をゲストティーチャーとして登用し、地域学習の

外部人材として参画させる教育課程も生み出した。新たに、校区の町工場の社長を外部人材として活用する学習もつくった。

実習校でのインタビュー調査で、教員の中に、地域教材を開発する教材研究のスキルを身につけられたことがみられた。一方、インタビュー調査の中で、教員の中でも特に経験の浅い教員が、地域教材の教育課程への組み込みについて苦手意識を持っていることを聞くこともできた。

3. B実習校での取り組み

3.1 B実習校について

令和7年4月人事異動があり、約15年前に勤務していたB実習校に赴任した。学校規模は前年のA実習校とほぼ変わりはないが、都市部に近いA実習校に対して、現在のB実習校は山側になる。校区は市の重要文化財が多く、里山の面影の残り、地域行事は自治会の影響力が大きい。

B実習校では地域の外部人材の働きで、コロナ禍にもかかわらず地域学習の途切れていない学年があった。一方、A実習校と同じように地域学習が教育課程にない学年もあった。

3.2 B実習校での地域教材の教育課程への組み込み

実習校の中学年は、既に地域学習が教育課程に組み込まれていた。校長として、実習校の特色をさらに伸ばしていけるように、教員とともに地域学習に臨んだ。中学年の取り組みは、学校だよりに大きく掲載し、保護者に配付・配信し、登校見守りボランティアや地域教育協議会の役員や委員にも配付した。今後も実習校の特色として継続していく。

一方、地域学習の教育課程への組み込みが進まない学年や、地域の外部人材が見つからない学年もあった。筆者は率先して外部人材や見学先を見つける等、地域の学習素材の教材化に取り組んだ。地域学習に関するインタビュー調査を11月～12月に実施して、B実習校の課題を洗い出した。

4. 成果と課題

校長として取り組んだ成果は、教育課程の精査・精選ができたことである。これは教員にゆとりを生み出すことにも繋がり、受け入れられた。校長が学校の実態から課題を見つけ、教育課程の編成をしていくことの大切さが示唆される。

教員の成果としては、教育課程に地域学習を組み込み、コロナ前の取り組みを戻せたことである。また地域の学習素材を教材化する実践は、今後も教員、特に経験の浅い教員に伝えていきたい。今、インターネットで簡単に調べ学習を行える。だからこそ、地域でのリアルな体験・生身での直接体験が必要だと感じた。

一方で課題もある。校長が地域との窓口になるだけで、教員や地域の外部人材の中に窓口となる担当をつくることができなかった。今後も校長が地域とのコミュニケーションの懸け橋になりつつ、学校全体で地域教材の教育課程への組み込みを進めていきたい。